

5 1 回生

「総合的な探究の時間」実践報告

探究推進部 有本 明日翔

2023 年 11 月に本校で開催した「第 41 回高校教育シンポジウム」の第 3 分科会にて、「探究活動『附高ゼミ』の年次進行と各学年の取り組み」と題し、実践内容を報告した。本稿では、シンポジウムでの発表をもとに、51 回生（第一学年）のこれまでの実践を整理し、それらを通して得られた知見から、このような活動の意義や今後の活動の方向性についてまとめた。

<キーワード>総合的な探究の時間 自己探究 学問探究 地域探究 高大連携 地域連携

1. はじめに

本校では、独自のスクールポリシーを達成する手段として「SEH プロジェクト」を設定している。「SEH プロジェクト」では、生徒の「人生を切り拓く探究力」育成を狙いとした、あらゆる教育活動を巻き込む教科・分掌・部活動横断型プロジェクトとなっているが、その中核を担う教科が「総合的な探究の時間」である。これまで各学年の裁量に任せ、学年の特色を前面に出していた総合的な探究の時間を、学校として生徒の入学から卒業までの 3 年をどのように描き、設計するかが本校の課題だ。SEH プロジェクトが立ち上がって 2 年がたった今、大きな枠組みとして、2、3 年次に、隣接する愛知教育大学と連携した「附高ゼミ¹⁾」を実施することは固定され、ある程度形になりつつある。しかし、1 年次に総合的な探究の時間を通して、何を経験させ、身に付けさせるのかはまだ定まっていない。そんな状態でスタートを切った 1 年次の総合的な探究の時間を、どのような意図で企画立案し、実施してきたかを整理していこうと思う。

2. 年間を通した全体構想

1 年次の総合的な探究の時間のカリキュラムマネジメントを考える上で課された命題は、「2 年次から始まる『附高ゼミ』に向けて必要となる探究力の基礎・基本を身に付けさせること」であった。そこで、探究する対象が「自分」→「学問」→「社会（地域）」と中から少しずつ外側へと広がっていくよう、カリキュラムの大枠を以下のように設定した。

- (1) 自己探究（全 4 回）： 本校オリジナルテキスト活用
- (2) 学問探究（全 10 回）： 進路指導部、愛知教育大学と連携して実施
- (3) 地域探究（全 18 回）： 本校オリジナルテキスト活用
刈谷市井ヶ谷町と連携して実施

3. 実施概略


- (1) 自己探究の実施（4 月～）：「自分を知る」

本校オリジナルテキスト（全 15 ページ書き込み式）を活用することで、探究の矛先を「自己（生徒

自身)」に向け、生徒の内的キャリア（興味、能力、価値観）と外的キャリア（キャリアロール）を整理させた。以下にテキストの内容を一部抜粋して紹介する。

①自分史を整理する（キャリアロール）

ドナルド・E・スーパー氏が提唱する「ライフキャリアレインボー」を参考に作成した自分史（図1）を生徒に記入させることで、高校生になるまでの外的キャリアの整理を行った。

ワーク1  これまでを振り返り、覚えていた「出来事」をロール別にまとめていこう。

	時期			
	出生～小学校	中学校	現在	大学生10年後
子ども (家族の役割)			%	
学生 (学校の役割)			%	
プライベート (学校の役割)			%	
職業人				
配偶者?				
親?				

図1 自分史

②価値観の整理

ワーク1で整理した外的キャリアから、ワーク2では内的キャリアへと落とし込んだ。図2は、自分の「価値観」に気付くために、時期に応じた充実度・満足度の曲線を引くワークである。ワーク3以降は、曲線が山のとくと、谷のときの共通項を見つけだし、ワーク4では、山と谷で共通することから価値観を抽出する作業へと続いた。

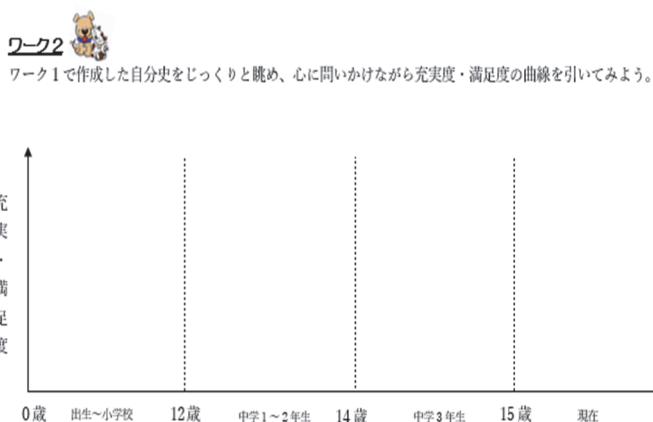


図2 価値観の整理

自己探究の狙いは、自己の内的キャリア・外的キャリアを整理すること、そして、内省（振り返り）の習慣付けを行うことであった。1年生の4月に自分を整理することで、今後3年間のあらゆる活動がそこに積みあがっていくことを狙いとしている。言い換えれば、この先3年間で経験するあらゆる活動を、単発的なもの（点）として終わらせず、内省を通して意味づけを行うことで、有機的につながったもの（線）にすることを狙いとしているのだ。そこで、生徒が定期的に振り返り、内的キャリアへと落とし込むことができるよう、新たなポートフォリオ（自己探究シート）を導入した（図3）。

分類の欄には、プルダウン式で「外部試験」「部活動での取り組み」「授業での取り組み」「外部の講座や応募したもの」「学校外の活動」「その他」から選べるようになっている。3年間におけるあらゆる活動をこの1枚で集約できるようにするための。2022年度より高校課程において指導要録が改訂され、新たに「主体的に取り組む態度」が盛り込まれるようになって以来、全ての科目で振り返りの機会を設けるようになった。しかし、振り返った記録がポートフォリオとして一元化されておらず、後から読み返しづらいという課題を解決すべく今回の仕様を採用した。

生徒の入力状況はまちまちだ（2023年12月現在）。何かあるたびに欠かさず記入している生徒もいれば、指示されたときのみ入力している生徒も見られる。2年後の彼（女）らの成長の軌跡と、大学入試における総合型選抜、学校推薦型選抜を目指す生徒の適性を見分ける指標の1つとなっていることを期待している。

#	外的キャリア			内的キャリア	
	分類	日付	名称	メモ	まとめ
	プルダウンメニューから選択	資格試験は証書の日付	やったこと、講座名、教科名、大会名、資格など	出来事の内容、感じたこと、考えたこと、努力のプロセスなどを思いつくまま書こう	あなたの身につけたことや成長を文章にまとめよう
例	3. 授業での取り...	2023/8/27~8/29	OO大学公開講座「△△×××」	3日間OO大学に通った。1日目は教授から当該分野の研究の現状についてレクチャーがあり、各自の研究主題を見つける課題が出た。2日目は、先生がたくさん来て、受講者それぞれの課題について、研究する方向性とやり方を教えてもらった。3日目は、受講者全員が前日に調べたことやさらなる課題を発表し合った。	この分野に興味を持ったのは、高校の歴史総合の授業を受けてからだが、大学ではより狭い範囲のことをより深く突き詰めて研究しているのと言うことが分かった。私は△△について興味を持ったので自分の研究主題にしたが、私たちのグループについてくれた先生が、参考になる資料を示してくれたので調べることができた。その中でさらに△△の××に興味が出てきたので、今後は自分自身でも調べてみようと思う。この講座を通して、研究の対象を絞って考えたり調べたりすることのおもしろさと大変さを知った。また、文献を調べるには、教科書を読むのはまた違う根気や集中力が必要だとわかった。
1					
2					

図3 自己探究シート (Google スプレッドシート)

(2) 学問探究の実施 (5月～): 「学問を知る」「探究手法を知る」

「(どの学校でも行っている) 進路学習を探究サイクル (問い設定→情報収集→情報の整理・分析→発表) に乗せて進めることができないか」という着想から、進路指導部が学問調べを始めとしたコンテンツを、探究推進部²⁾が探究の手法を提供する形で共同実施した。進路学習コンテンツを通して様々な学問分野に触れた後に、特に自分の興味をもった学問分野の中から問いを設定し、最後には探究した成果を発表するという流れを採用した。

その細かな内容は本稿では割愛するが、中でも、愛知教育大学の先生が隔週で4回にわたり授業を実施した「高大連携授業」は新たな試みであった。大学の先生から、それぞれの研究している分野内容はもちろん、その研究手法や予算、期間、苦労している点、それを研究することになった経緯等を紹介してもらった企画となっている。進路学習の一環で、大学の先生から授業を受け、大学レベルの学問に触れる機会はどの学校にも用意されているが、これから探究をしようとする生徒諸君が、大学レベルの探究手法そのものに焦点を当てる機会というのはあまり見られないように思われる。当日の控室で、大学の先生方一人ひとりに趣旨を丁寧に説明し、大学の先生方も高校側の意図を理解して下さったため、大変良い企画となった。来年度の52回生(第一学年)にも継続して実施したい。

(3) 地域探究の実施 (10月～3月): 「地域社会を知る」「探究スキルの習得」「探究スキルの演習」

探究の矛先を「地域社会」に向け、本校が位置する刈谷市井ヶ谷町を舞台に、探究サイクルを実践した。具体的には、井ヶ谷町の抱える「課題」を発見し、そこに対しての「問い」「仮説」を立て、「調査活動」を経て、3月には井ヶ谷住民の前で、成果発表をするというものだ。本校オリジナルテキスト(全19ページ書き込み式)を活用し、座学を通じた探究スキルの習得と並行する形で、井ヶ谷町を舞台に演習する形式を採用した。

最終的に計20人の住民の方々に協力して頂く体制を構築することができた。地域探究の1回目の授業には、井ヶ谷地区の地区長、公民館長(次年度地区長候補)、そして、ファシリテーターとして愛知教育大学の先生1名をお招きしたパネルディスカッション、2回目には、協力者20人全員に来校して頂き、生徒と小人数グループで交流した座談会、その後は必要に応じて適宜サポートに入ってもらい、3月には、協力者20人の前で生徒が最終成果発表をする予定だ。執筆時点(2023年12月現在)では、具体的な実践報告ができないため、ここでは、地域を巻き込んだ探究実践が他校で転用できるよう、地域に依頼してから、実現に至るまでの経緯や苦労を書き記したい。

①実現に至るまでの出張記録

5月9日（火）

大学の先生の仲介のもと、井ヶ谷町に協力依頼をするため、企画書（依頼文）と菓子折りを片手に地区長と公民館長に挨拶に伺う。個別具体的話は後回しに、協力して頂ける関係づくりに注力した。

6月27日（火）

前回と同じメンバーで実施。運営上の必要性から、5月9日の会議で頂いた「地域役員一覧」を整理・統合して全8探究分野（防災、安心安全、生活、農業、スポーツ文化、健康・福祉、子ども支援、カキツバタ）を編成。当日は編成についての細かな修正含め、具体的な話を進めた。

8月22日（火）

前回のメンバーに加え、井ヶ谷を運営している中核メンバーを交えた計12人が参加。用意した最終的な企画書をもとに、詳細を詰めた。

②地域住民に協力して頂くために

私（筆者）自身、今回の地域探究を運営し多くの学びがあった。例えば、「連絡体制の構築」だ。協力者の多くは仕事を退職された方であるため、日常生活にメールを確認する習慣がない。一斉送信では連絡が行き渡らないのだ。そのため、依頼する段階から1件ずつ電話をかけたり、連絡を回すために1人ずつに手書きの便箋をしたため郵送したりした。

次に「信頼関係の構築」だ。地域の行事に参加して、顔を覚えてもらうことで、「あの時はお世話になりました。」と先方から前向きに支援して頂けるようになった。地域の中には、地域の文化やルールがある。地域住民の善意に働きかけて協力してもらう以上、まずは、教員自身がその中に入り、信頼関係を築いていかなければ、地域を巻き込んだ探究を円滑に進めることは難しいだろう。

4. おわりに

高校教育において、近年の教育トレンドの1つである「探究」の企画運営に頭を悩ませている学校は多いと聞く。もちろん本校もその1つだ。様々な変革が求められる昨今、筆者は、前例主義で凝り固まった地盤を、一点強行突破して新たな「探究」という新大陸を起こすというよりも、大局を捉え、「探究」というファンタジーに昇華し、地盤を再編集（統合）していく、そんな「しなやかさ」が求められている気がしてならない。活動の元となる概念や信念を創造し、これまで各教科、分掌、部活動で行われてきた可視化されていない魅力的な活動を、「探究」という共通言語をもとに有機的に繋げ可視化していく。そんな狙いをもって、新たな分掌として本校で2年前に発足したのが「探求推進部」である。順風満帆とは程遠く、風呂敷を大きく広げようとする努力（スケーラビリティ）と属人的な運営とならないようにする仕組みづくり（サステナビリティ）の両立に日々頭を抱える毎日だ。本稿では、第一学年の取り組みの概要を述べるに留まったが、これを目にした読者が、本校と様々な立場から意見交換するきっかけとなることがあれば、これ以上の喜びはない。

脚注

1…隣接する愛知教育大学と連携し、教授、大学（院）生、生徒で少人数のゼミを形成。約2年間かけ、生徒が個々で探究したいテーマを探究していく。49回生から実施している。

2…本校独自のSEHプロジェクトを学校全体を巻き込み推し進めることを目的に、2022年新たに発足された分掌。総合的な探究の時間も各学年に配属された部員が中心となり、企画・運営を行っている。